

平成二十二年七月十五日(木)

第四〇五回 史跡めぐり

江戸時代から伝承される

下間久里の
獅子舞と越谷だるま

NPO 法人 越谷市郷土研究会

第四〇五回 史跡めぐり

江戸時代から伝承される

下間久里の獅子舞と越谷だるま

● 日時 平成二十二年七月十五日（木）

● 集合 東武線大袋駅 午前九時十五分

● 参加費 五〇〇円

（資料代・保険料）

● 案内者 常任理事 篠原陸郎

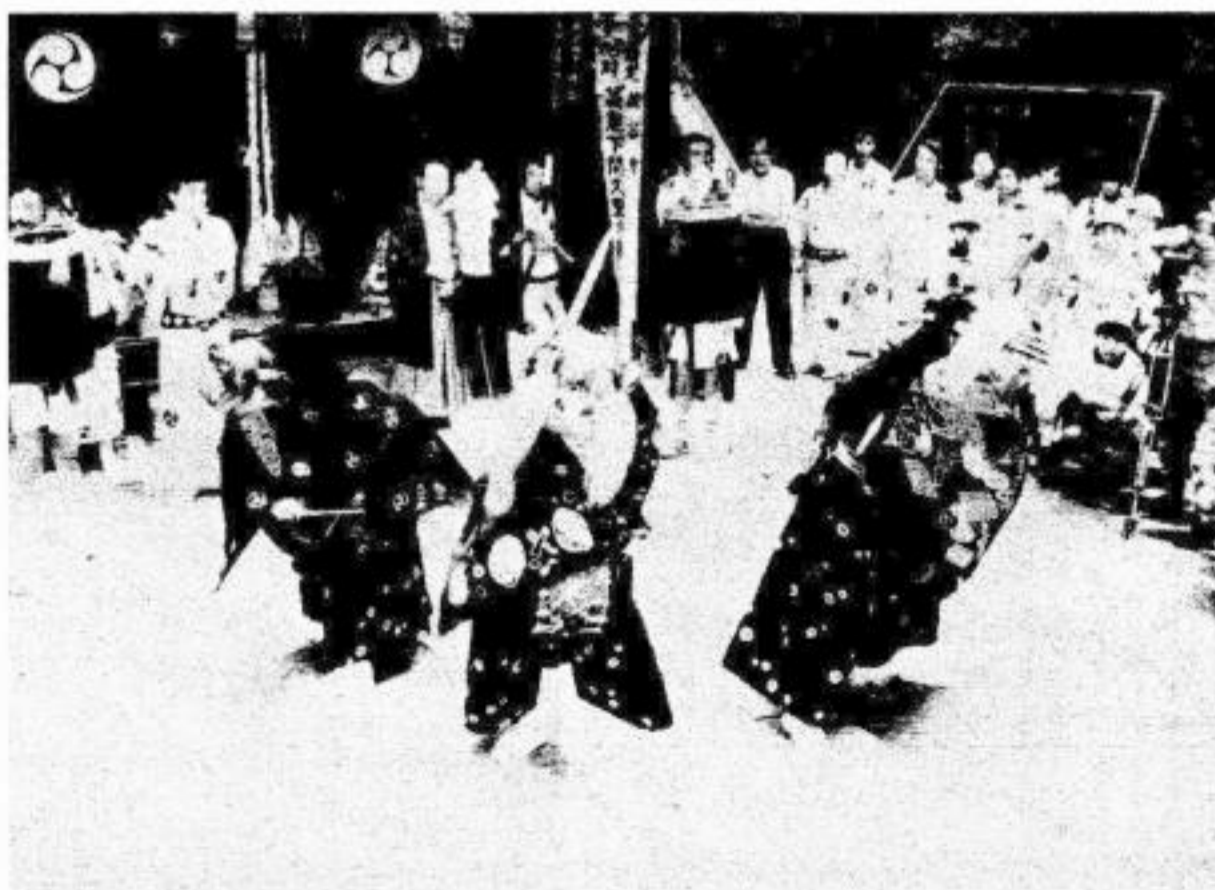
コース（徒歩約6^{km}）

<大袋駅>

- 香取神社
（下間久里の獅子舞）
- 大六天と算額
- 石仏群
- 中村商店（達磨屋）

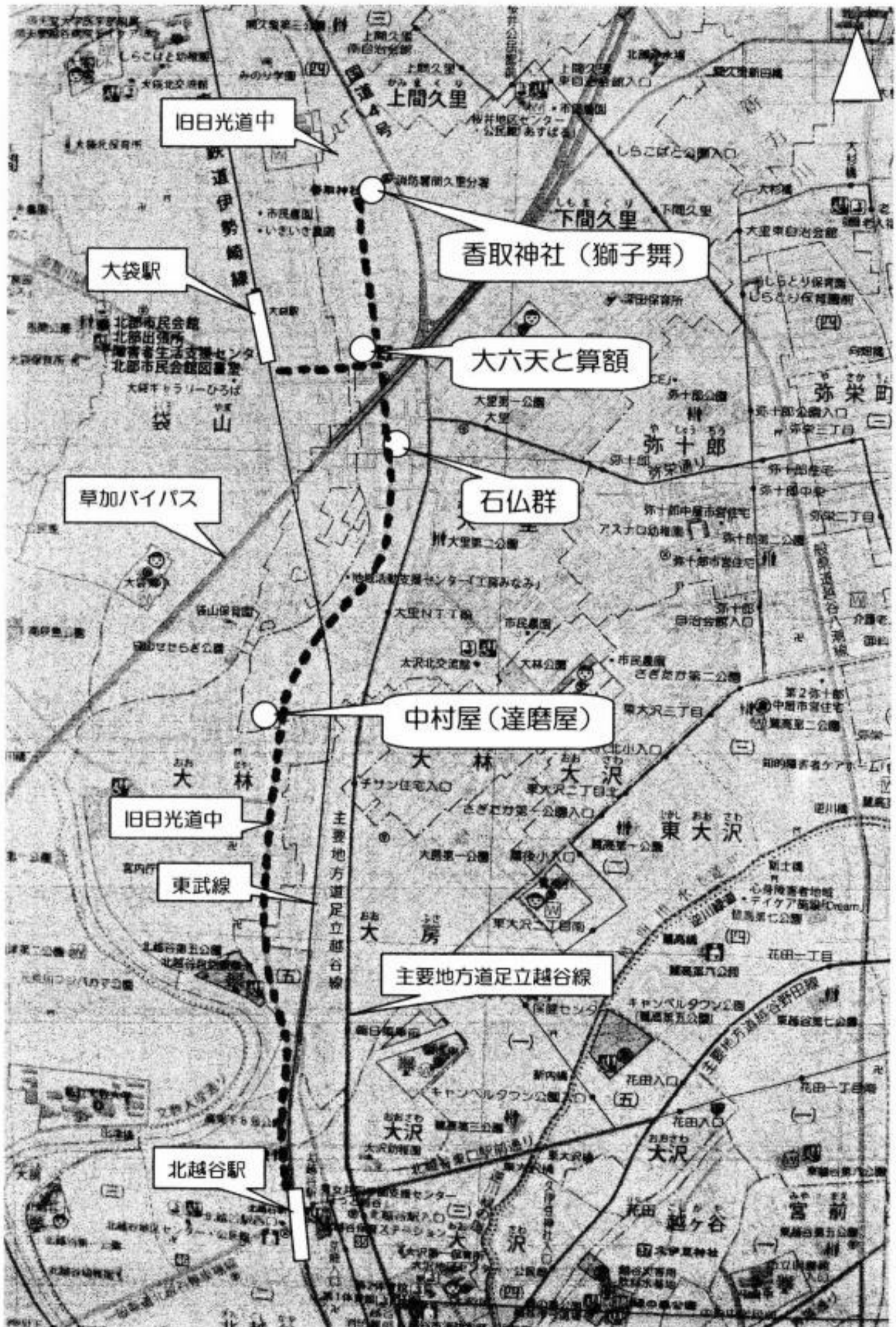
<北越谷駅>

解散 13時頃



下間久里の獅子舞

史跡めぐりコース（旧日光道中）



○ 下間久里の獅子舞 (昭54 県指定・無形民俗文化財)

● 名称・期日・場所

(昭57年 埼玉県民俗学シタール「下間久里の獅子舞」より)

- ・下間久里の獅子舞は、雨下無双角兵衛流と呼ばれている。
- ・この角兵衛流を称える獅子舞は、「埼玉県民俗芸能誌」によると、下間久里の獅子舞のほか、秩父市の浦山の獅子舞、秩父郡皆野町の門平の獅子舞、同町大神の獅子舞、同町金沢の獅子舞や、下間久里から伝授を受けたといわれる春日部市の銚子口の獅子舞など広い範囲に分布している。そして、この角兵衛流が獅子舞の宗家本流といわれている。
- ・角兵衛流のほか、県内には祐作流・稲荷流・下妻流・樋口流・津島流などがあり、それぞれ地域的なまとまりをもった分布を示している。

・下間久里の獅子舞の執行期日は、毎年七月十五日で、古来から期日を変更することなく実施されている。

・この獅子舞は、夏の獅子舞としてその特色があり、悪魔ばらい、厄病退散といった信仰に支えられている。したがって、獅子舞は村回りが中心になっている。獅子舞の一行は、鎮守香取神社の神前をふり出しに、下間久里地区内の約一〇〇戸の家を回って獅子舞を行う。各家には土足で座敷に上がり、一曲ないしは二曲を舞い、元名主宅である藤田家では座敷で通常の舞を舞うほか、庭にムシロを敷いて「出端」と称す、ほかでは舞うことのない曲目を舞う。また、村回りの道中、三ヶ所の村境でも舞われるが、その場所は下間久里と上間久里との境、下間久里と大里との境、間久里新田と船渡との境である。そのほか、地区内にある平(たいら)本家で祀られている雷電様、大六天、不動様でも獅子舞は行われる。獅子舞が執行される時間は、最初に神社の拝殿でシメの神事が開始されるのが午前十時、最後に大里地区との村境で「辻切り」の曲が舞われ、手拍子でシメが行われて獅子舞が終了するのが、夜も大分更けた午後一一時近くである。

● 以下は昭57年 埼玉県教育委員会「獅子舞の分布と伝承」より

下間久里の獅子舞

話者 中原 實

(明治四十二年二月二〇日生)

松崎 福太郎

(大正二年二月九日生)

一、名称・由来等

獅子舞又はシッサマなどと呼ばれる。

この獅子舞は京都から文禄三年(一五九四年)に伝わったという伝承があるが、明らかでない。下間久里には巻物があるが、これを見ると目がつぶれるといわれ公にされていない。しかし、下間久里から伝授されたといわれる獅子舞が四か所で行われていて、そこにも巻物が伝えられている。これを表化すると次の通りである。

表一

名称	所在地	伝授の年代	進出人	受取人
パンパカ獅子舞	千栗野野田市清水町	元禄六年(一六九三)	下間久里村 荒井平兵衛	八幡大菩薩 清水村
銚子口の獅子舞	春日部市銚子口	元禄一〇年(一六九七)	下間久里村 荒井平兵衛	銚子口村 善生中
赤沼の獅子舞	春日部市赤沼	享保二年(一七二七)	下間久里村 無双角兵衛	赤沼村 平七郎
中野の獅子舞	北葛飾郡庄和町中野	享保五年(一七三三)	下間久里村 無双角兵衛	中野村 御旗中

二、所在地

越谷市下間久里

三、期日・場所

七月一五日に香取神社と村内各戸、及び村境において行なう。

四、役割と服装・楽器等

諸役割に服装を中心に記述する。

○太夫 浴衣の上に紋付きの羽織、袴を着る。

白足袋に草履をはく。手には巻物のついた御幣を持つ。

○副太夫 浴衣の上に袴をはく。白足袋に草履をはく。香取神社の宮参りの時に刀を持つ

副太夫の役が出来たのは、昭和四年からで、理由は太夫一人では村回りが大変なので、太夫の代理として村回りの時のオハライを一部受持つ。

獅子

○太夫獅子 獅子頭の形式は竜頭。角は角型で、その前面に「雨下無双角兵衛」の彫り文字がある。頭毛は黒色の鶏毛で上顎の間脇には白い髭がある。こうがけは、麻と木綿の混紡で地は濃緑色。顎の下に宝珠を圖案化したものを黄色く染めぬき、その中心に赤い宝珠が三個並んでいる。裾には青と赤で雲巻模様と鈎形の桶妻があしらってある。

○中獅子 太夫獅子とほぼ同形式である。ただし、角は文字のかわりに三角形の模様が刻まれている。こうがけの模様は、顎の下の赤い宝珠が一個であり、裾には青と赤と黄の水玉及び太鼓が描かれている。

○女獅子 頭は太夫獅子・中獅子にくらべやや小さい。角はなく、頭頂部分に宝珠がある

箱獅子

笛方

曲目

こうがけの模様は顎の下の宝珠形の圖案の色は赤で、中心に宝珠はない。裾の模様は赤と青の三つ巴である。

獅子頭とこうがけは以上の通りであるが、その下の上半身は、紺地の褌裈で、背中には牡丹、両袖口には蝶を白く抜ぬいてある。下半身は紺地に赤と青の水玉模様のはいった切袴をはく。他に紺の手甲、白足袋に草履をはく。

箱獅子用の服装は特になく、普段着の上に箱獅子をかぶる。箱獅子の中心には赤い御幣を、周囲の四辺にはそれぞれ、赤、青、黄、緑の御幣を立てる。垂布は薄手の絹で地は紺である。

笛方は浴衣に白足袋・草履をはく。

五、曲目・歌詞等

下間久里の獅子舞は、まず香取神社の境内で行われる。

鳥居の前で行列をつくり、「街道下り」の笛で拝殿前まで進む。ここで「宮参り」を行ない、この後、太夫を先頭に香取神社の神殿を一回りして、前の位置に戻り、「津島」、「はや」の二曲を舞う。それから、太夫が御幣を持って太夫獅子の後ろにつき、「シッ」と言って御幣を太夫獅子の背中につけると、太夫獅子が「くじ」を切る動作を行なう。この時「くじ」という笛の曲もある。

香取神社の境内での獅子舞は以上で終り、この後、村回りが行われる。

村回りにおいて獅子舞を行なうのは、下間久里のそれぞれの家・堂・小祀・村境においてである。どの家でも行なう獅子舞は「地固め」という曲である。現在は、その曲の他に

「津島」、「はや」、「よつあげ」、「ほっこみ」、などの中から一曲行なり。以前は、ほとんどの家では「地固め」一曲しか行なわなかったが、オヒネリの類が多いと、「地固め」の他に「津島」、「はや」などを二曲くらい選んで獅子を舞った。獅子頭をかぶりかえする家では、「地固め」の他に二曲くらい行なり。なお、「地固め」は家の中で行なりが、他の曲は庭で行ってもよい。

ダンナサマと呼ばれる元名主の家では、「地固め」を舞った後、夕食をとり、その後庭にむしろを敷いて、「津島」、「はや」、「出端」、「さんざり」などの曲を行なり。

「出端」には「太夫の出端」と「女獅子の出端」があり、これは太夫の持つ御幣にかかる動作を含んでいる。「さんざり」は獅子が舞うのではなく、オカメなどの面をつけた道化が面白おかしく踊るものである。

現在行われていないが、ダンナサマの家では「太刀の舞」、「弓くぐり」も行われた。村内にある不動様・雷電様・第六天様の前では「津島」、「はや」が行われる。第六天様の前では「くじ」も行われる。

上間久里と船渡との境では、太夫が御幣でオハライをした後、「津島」、「はや」の二曲が行われる。大里との境では、獅子が「津島」、「はや」の二曲が舞われた後、太夫が御幣を左手に刀を右手に持ち「辻切り」を行なり。

六、伝承

獅子連中への加入資格としては、下間久里に生まれた長男であること、ワカインシュコウに入っていること、この二点をまず挙げることができる。この他に、二・三男であった

子供組 若者組

でも村内に分家して一家を構えれば加入資格を得ることができる。二・三男の場合、他村に出てしまうことが多いので、二・三男に獅子を教えると、他村に獅子舞を持っていかれる可能性がある。二・三男には獅子を教えないのだという。他所より婿入りしてきた人も獅子連中には加入できない。しかし、その息子の代になり、前の二条件を満たせば加入できる。

しかし、この二条件を満たしている者が、全て獅子連中に加入しなければならない、ということではない。この二条件を満たすと、ほとんどの人が獅子連中に加入するが、ダンナガタと呼ばれる地主の息子は獅子連中に加入しないこともあった。

一度獅子連中の成員になると、獅子を舞わなくとも脱退することはなく、死ぬまで成員権がある。下間久里では、大東亜戦争の時も獅子舞は欠かさず行われてきた。この戦争で獅子連中の人が亡くなった時には、その家の次男が跡取りになるので、この人は獅子連中にも加入する、という例もあった。

下間久里では、十五歳から三十五歳までの跡取りで構成されているワカインシュコウがある（現在変化している）。この組織と獅子連中とは非常に密接な関係にある。

ワカインシュコウへの加入は七月五日（現在は七月七日以前の日曜日）のムギバツに行われる。新加入者は金と酒を出す。ムギバツというのは、ムギの収穫を感謝して、酒を二升香取神社に供えることである。そして、このムギバツにおいて、獅子の用具の入っている箱から練習用の太鼓を持ち出し、獅子舞の練習を行なり。ワカインシュコウへの新加入者も獅子舞の練習をさせられ、先輩から「なんとか獅子が舞えそうだから獅子連中にはいれ」

と勧誘され、新加入者の多数が獅子連中にもはいることになるという。また、ムギバツにおいて、獅子舞の練習日程が決められる。これは、ワカイシユコウのメンバーのほとんどが獅子連中に入っているし、また、祭において獅子を舞うのはこれらの若い人たちが多く、ということと考えると理解できる。

ここでは祭祀組織についてだけ記す。

下間久里に住んでいる人にとって重要な祭が二つある。一月一日に行われるオビシヤと七月一五日の獅子舞である。そして、この二つの祭を執行する組織は相互に独立している。

オビシヤ行事を中心に執行するのは、香取神社の祭祀組織であり、この組織により末社の稲荷神社の初午や秋の新穀感謝祭が執行される。

これらの祭を中心に行なうのは、宮世話人で、現在三名いる。上組・中組・下組と呼ばれる各村組から一名ずつ出ている。しかし、宮世話人が三人になったのは、昭和三十年代にはいつてからで、それ以前は二名であった。一人は区長が兼任し、もう一人はダシナガタと呼ばれる地主階層の一人が勤めていた。宮世話人の継承は、死に譲りという形を原則としてとっている。

宮世話人の下に氏子がいる。そして、オビシヤを行なう場合には、氏子が一〇の組に分かれ、上から一年交代で当番の組が移動する。初午の時には、五軒ずつ組分され、オビシヤとは逆に下から一年毎に当番の組が移っていく。

以上が香取神社の祭祀組織であり、これと異なる原理により獅子連中は組織化されてい

る。氏子組織の場合には、下間久里に生まれれば、必然的に香取神社の氏子になるが、獅子連中の場合には、入りたくない人は入らなくてもよいのである。例えばダシナガタの跡取りなどは獅子連中に入らないことも多かった。

獅子連中の役職には太夫・副太夫・会計がある。副太夫は昭和四年に新設され、会計は昭和五五年に新設された。会計は上・中・下の各組から一人ずつ選出されている。

これらの役職の中で太夫の役割が最も明確でありかつ重要である。現在、獅子舞の練習は公民館で行っているが、公民館ができるまでは太夫の家で行っていた。また、獅子舞を行った翌十六日はブツパライといい、獅子連中の人たちだけで直会を行なう。ブツパライの宿も太夫の家である。獅子舞の用具の保管も太夫の家で行なう。現在、ブツパライは公民館で行われ、獅子舞用具は香取神社の境内にある倉(獅子の倉といわれる)に保管している。

以上のとおり、太夫は重要な任務を負っている。この太夫の継承は死に譲りだった。太夫は死ぬ時に枕元に次の太夫を呼んで、「タジ」や村回りの時に各家で行なうオハライの囃え言を申し送った。次の太夫の指名は太夫の権限である。現在、太夫の継承は、村回りを行なうのが肉体的に大変になると、次の人に交代する、という形である。今では、囃え言も口題ではなく、書いたものを次の太夫に渡すという形式をとっている。

役職について以上の通りであるが、獅子連中の内部区分もみられる。ワカイシユと元老である。両者は次のような役割分担が行われている。「御幣を作る時は、ワカイシユが竹つけずりで、元老は紙を切り御幣を作る」とか、「獅子の練習では、元老が回りで見てい

て、獅子舞の指導をする」とか、「ブツパライの時の獅子舞用具の洗濯はワカインシュがする」などである。

ワカインシュはムギバツに参加するくらいの年齢層の者で、元老は太夫・副太夫・会計を含む年齢層の者である。獅子連中全員がワカインシュと元老に二分されるわけではなく、ワカインシュと元老の間にはさまれた年齢層の人達がいる。ブツパライの時には、これら三グループに分れて酒を飲んだりしている。また、獅子連中の新加入者は、ブツパライの時の飯炊きが慣例になっていた。

最後に獅子連中の年度別加入者数(表2)と下間久里の諸集団の役職(表3)を掲げておく。(一六七～一六九頁)

七、祭り

獅子連中は香取神社に午前八時頃集まり、神社で酒を飲んでお浄めをする。

その後、拜殿で、太夫が御幣を持ち、元老たちはその周囲に座り、最初に獅子を舞う者が獅子頭をつけて控え、笛方が「津島」、「はや」の曲を笛だけ奏する。これをシメという。

この後、鳥居の外側から行列をなし、「街道下り」の曲で拜殿前に進む。

この行列は御幣を持った太夫が先頭になり、刀を持った副太夫・笛・箱獅子・女獅子・笛・箱獅子・中獅子・笛・箱獅子・太夫獅子・その後数人の笛方が続く。

拜殿前になると、太夫・副太夫は神殿に一礼する。この後、太夫・副太夫・箱獅子は神殿を背にして、三匹の獅子に対する。獅子は、まず「官参り」を行なう。この後、太夫を

先頭に行列をなし、神殿を一周する。

そして、先ほどと同様に太夫・副太夫・箱獅子は神殿を背に立ち、獅子は「津島」「はや」の曲を舞う。この後、太夫は太夫獅子の後につく。太夫は「くじ」の唱え言を行ない、手に持った御幣を太夫獅子の背中につけて「シ」というと、太夫獅子が「くじ」を切る動作を行なう。

以上で、香取神社境内での獅子舞は終り、村回りが始まる。

村回りの順は、神社の裏手にある家から始まる。その後、上間久里との境の道路上で獅子舞が行われる。村境では、太夫が御幣でオハライをし、それから獅子が「津島」、「はや」の曲を舞う。

村境での獅子舞が終ると、下間久里の上の方から一軒ずつ獅子舞を行なう。

民家では、御幣を持った太夫が先に立ち、獅子も続いて縁側から土足で入って行く。家の中では家族が座って獅子のくるのを待っている。獅子は「地固め」を先ず行ない、その後で「ふみ」、「ぼっこみ」、「よつあげ」などの中から一曲舞う。獅子が舞っている間に太夫は神棚や家族の人をオハライする。

昼食をする家は昔から決まっている。この家では、昼食に正油のおにぎりを出すことと砂糖と冷たい水を用意して砂糖水をつくり、獅子連中を接待することが慣例になっていた。この後船渡との境では前記の村境と同様な獅子舞が行われる。

昼食をする家を始め、何軒かで獅子のかぶりかえが行われる。このような家では食物や飲物を用意して獅子連中を接待する。

夕食はダンナサマと呼ばれる元名主の家で行われる。この家では、太夫と獅子と舞う人は玄関から草履を脱いで座敷に上る。「地固め」が行われた後、夕食になる。献立は、うどん、きゅうりもみ、こんにゃく、煮物、それに酒が慣例になっている。

夕食後、ダンナサマの家の庭にむしろを敷いて、獅子舞が行われる。

「津島」、「はや」の二曲が行われた後、「出端」と呼ばれる太夫が持つ御幣に掛る動作を含む曲が行われる。この後、オカメなどの道化の面をかぶった人達が数人出てきて面白おかしい踊りが行われる。これは「しゃぎり」といわれ、子孫繁栄・五穀豊饒を祈るものだという。

この家での獅子舞は下間久里の人が大勢見にくる。また下間久里から婚出した女の人達もこの日は里帰りして、ダンナサマの家での獅子舞を見にくる。

この後、獅子舞は夜の部に入る。夜の部では、箱獅子を頭につけていた子供達は、箱獅子のかわりに提燈を持つ。

下間久里の各家、村内の雷電様・第六天様・不動様などで獅子を舞った後、大里の境に至る。

ここでは、まず三四の獅子が「津島」、「はや」の二曲を舞う。この後、太夫が右手に刀左手に御幣を持って「辻切り」を行なう。

午後十一時頃全ての獅子舞が終了になる。

八、信仰等に係る民俗

下間久里の獅子舞の祭の過程をつぶさにみると信仰的要素が強く残っている。祭の過程

を追いながらそれを見ていきたい。

フッパライの時にもシメと呼ばれている事象がある。フッパライには、獅子頭を飾り、その前に御飯を供えた後、皆で酒を飲み、獅子舞の道具を獅子の倉に納める前に、獅子頭の前で太鼓だけをつけ獅子舞が行われる。これがシメと言われる。これには神上げの意味があるだろうか。

獅子舞の練習を開始するのは七月五日のムギバツであることは既に記した。麦の収穫を祝うワカイン・コウの集まりにおいて、獅子舞の練習を開始するわけである。祭の前日である七月十四日には砂盛りが行われる。この砂盛りは全国各地の祭にみられる降神の場と同一と思われる。この砂盛りは、下間久里の人が朝早く三々五々香取神社にやって来て、境内の草取りをし、その草を穴を掘った中に入れ、その上に砂を盛るのである。砂盛りは香取神社をはじめ境内の末社などにも二個ずつ作られる。この砂盛りはそのまま放置され特に他の儀礼との関連はみられない。

七月十五日の祭当日には、獅子を舞う前に拝殿において、太夫が御幣を持ち、元老達が回りに座り、最初に獅子を舞う者が獅子頭をつけて控え、笛方が「津島」、「はや」の曲を奏する。これをシメという。これが祭の過程としては、神降しの意味を包含しているのかも知れないが、伝承としては意味不明である。

獅子舞の曲の中で信仰的要素を持つものには、「地固め」、「くじ」、「辻切り」がある。「地固め」は村回りにおいてどの家でも必ず行われるが、香取神社や村境・小祀の前などでは行われない。これも伝承としては意味不明であるが、信仰的要素があったと思わ

れる。「くじ」は香取神社境内と大六天様の前で行われるが、この曲の太夫の唄えり（これは調査において聞くことができない）や太夫獅子の芸態には信仰的意味があると思われるが、解明できない。太夫が御幣と刀を持って行なう「辻切り」は、下間久里の上の方から獅子舞を行ってきて悪魔を追いつめ、下の村境で悪魔を追いだすのであるという。

下間久里の人に「何故獅子舞を行なうのか」と聞くと、「ワルイヤマイ（悪疫のこと）が下間久里に入らないようにするためだ」という答が返ってくる。

この他にも信仰的要素でいくつかみられる。村回りの際に、太夫が御幣でそれぞれの家の神棚と家族をオハライする。この時には、それぞれの家の親戚の人が来ていて家族と一緒にオハライをしてもらう。

獅子舞の時には、太夫の持つ御幣の他、数種類の御幣を作る。下間久里の上と下の境に竹につけてさす御幣、香取神社境内の末社や小祀に祀り込める御幣、また、各戸毎に配る赤い御幣などである。赤い御幣は悪魔避けとして家のトゴロ（玄関）や床の間に置く。



「辻切り」(村境にて)

○ 大六天

● 大六天社（第六天社ともいう）

- ・旧家、平家の傍らに勧請されており、勧請年はつまびらかではない。かつては道路反対側にあった。
- ・江戸時代からの古社で、足の不自由な人にはことに靈驗あらたかであり、常に「わらじ」が社前に奉納されていたといわれる。
- ・七月十五日、下間久里の獅子舞が舞われる。

● 第六天（他化自在天・第六天魔王とも）

たけじざいてん

- ・仏教では衆生の世界を六道（天道・人間・修羅・畜生・餓鬼・地獄）に分かれる。その天道にも三界（欲界・色界・無色界）があり、その欲界にも六欲天がある。その最上層を第六天（他化自在天・第六天魔王）という。
- ・そもそも魔王（天魔）のことで、常に多くの眷属けんぞくを率いて人間界に於いて仏道の妨げをするといわれているが、お釈迦様が6年間の苦行の末悟りを開いた時、魔王はお釈迦様に降伏し、仏法を守護する神になったという。
- ・寿命は甚だ長く、一六〇〇才に及ぶという。

- ・第六天はさまざまな名称で集落の氏神や屋敷神に祀られ、とくに関東・駿豆地方に多い。
- ・又疫病除け・土地の守護神・作神・子孫繁栄等々、多様な機能を持つが、一方崇りやすいという。



大六天社の祠

○ 算額（昭50 市有形民俗文化財）

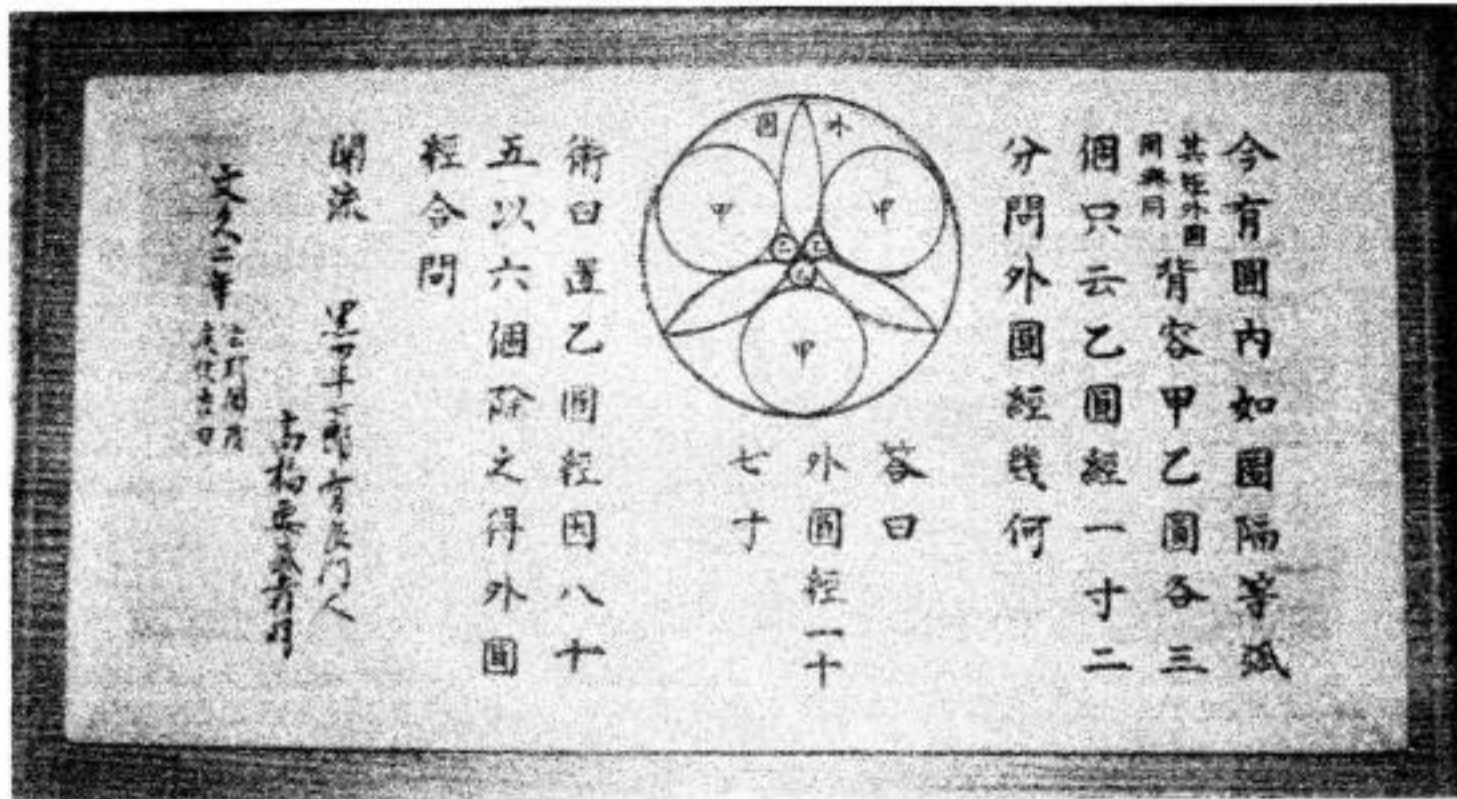
● 大六天の算額

- ・江戸時代の数学を算法、あるいは算学と称した。
- ・この算学を学ぶ人々が、算法の問題などを画いた額を神社に奉納したのが算額である。
- ・記録などを除いては、現存する算額の数は全国でも500面ほどしか確認されていないという。このうちの一つが下間久里大六天社の算額である。
- ・これは（次ページ図）埼玉郡新方領下間久里村の高橋要蔵が、文久二年（一八六二）六月に奉納したもので円周と径などを算定する問題とその解答を示した額である。
- ・このほか市域では、西方村不動堂に寛政九年（一七九七）斉藤利助が奉納した算額があったといわれるが、現在不明である。

● 算額とは

- ・日本独特の文化で、その目的のなかには、家内安全・塾の繁栄とか、孫の誕生を祝うもの、さらには難問が解けた、良い問題が出来た、あるいは自慢のためなどいろいろである。
- ・江戸前期の数学者「関孝和せきたかかず」があみ出した和算「関流」が圧倒的主流派になり、下間久里の高橋要蔵もこの流派の門人である。

大六天の算額



解き方
 乙円の直径に八十五を
 掛けそれを六で割れば
 外円の直径が得られる

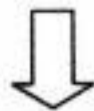


答
 外円の直径は十七寸である



今 図のように 外円の中に三個の同じ円弧(三個の円弧の長さの合計が外円の円周と同じ)がある。互いに円・円弧に接する甲乙の円が三個ずつある。乙の円の直径は一寸二分である。

問題 外円の直径はいくらか



$$\frac{1. 2寸 \times 85}{6} = 17寸$$

○ 石 仏 (加藤幸一氏の石仏資料より)

● 大里自治会館墓地

- ・ここは春日山秀蔵院(真言宗)の跡地である。
- ・今は廃寺となり共同墓地となっている。
- ・ここに九基の石仏が安置されている。

■ 永代施餓鬼供養塔

えいたいせがきくようとう



● 施餓鬼(会)

六道の世界(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天)の餓鬼道に落ち、飢餓に苦しむ亡者(体は痩せ細り、のどは針のように細く、また手にとった食物が火に変わってしまうため常に飢えに苦しんでいる。)に食物を供えて弔う法会。

浄土真宗以外の各宗派で行われ、禅宗ではとくに重視し、生飯(餓鬼のために、食前に少量の飯を取り分けて、野外や屋根の土などに置く)の儀式を食前に行っている。

● 盂蘭盆会

中国(苦しんでいる亡者を救うための仏事)から伝わり、祖先の霊を供養する仏事(お盆)で、施餓鬼会とともに行われることが多い、両者が混同されるようになった。

■ 青面金剛像庚申塔

しょうめんこんごうそうこうしんとう



■ 普門品供養塔

ふもんほんくようとう



女人をぶらさげている青面金剛像は一般には左手を降ろして女人の髪を毛をつかんでぶら下げるのであるが、これは左手を上方に挙げて女人の髪を毛をつかんで、その女人をぶら下げる姿を描いた珍しい庚申塔である。

● 普門品

法華経の第二十五「観世音菩薩普門品」の略称。観音経(かんのんぎょう)とも。法華経の中で、これだけ取り出して読むことが多い。

だいろくてん
 ■「大六天」文字塔



年号不詳

・大六天

大六天とは、正しくは「第六天」と書き、この天に生まれた者は他の作り出した楽しみを自由自在に自分の楽しみとするこ
 とができるという。他化自在天ともいう。
 この天には仏法の妨げをするといわれる魔王の住所があるとい
 い、「第六天の魔王」の力で願い事をかなえてもらおうとする
 信仰に基づいている。

みょうごうたう
 ■名号塔



年号不詳

・名号

特に仏や菩薩の中の阿彌陀仏を指し、「南無阿彌陀仏」と阿彌陀
 仏を唱える（六字名号）を意味することもある。

・南無

一般に帰依の対象となる語をそのあとにつけて、感動詩的に用
 いる。（南無八幡台菩薩・・・）

■出羽三山供養塔



天保15年(1844)

大里村講中

（以下は1993年山形県西村山地域史研究会「西村山地域史の研究」より）

○越谷の出羽三山信仰

近世に隆盛を極めた出羽三山信仰は、越谷の信者（下間久里村・四町野
 村講中・弥重郎村講中・後谷村・大里村講中・恩間新田講中など）も多
 く、その証である供養塔が安永（一七七二〜八一）から嘉永（一八四八
 〜五四）にかけて十四の造立がみられ、五穀豊穡・家内安全・無病息災・
 天下泰平・国土安全などを祈って、三山懸け又はお山懸けと称して三山
 参詣している。

・享保十八年（一七三三）の全国の行者の数は大町念仏講帳に十五万七千
 余人とある。

○武州越谷中野家の「出羽三山道中記」

行者達の中には参詣の旅の全行にわたって日付・里程・懸所・名所・集
 落・交通・小遣銭などを記入した道中記を残し、現在百点ほどの所在が
 確認されており、その信仰の実態が信者の側から明らかにされつつある。

・越谷市には越谷市蒲生の中野家の一冊のみである。
 ・中野家は古い由緒を持つ武士の末裔で、近世の初頭、この地に土着した
 家柄で、幕府領蒲生村の名主を世襲している。
 ・延享二年（一七四五）の道中記の特徴は

- 1 記号によって天候、日付、宿所、懸所、里数も表示している。
- 2 集落、寺社仏閣、町並み、名所地を簡潔にまとめている。
- 3 道路、耕地の状況を詳しく書いている。
- 4 著名宿場にこだわらず一日の行程をできるだけ進めるとしている。



寛政11年(1799)
大里村

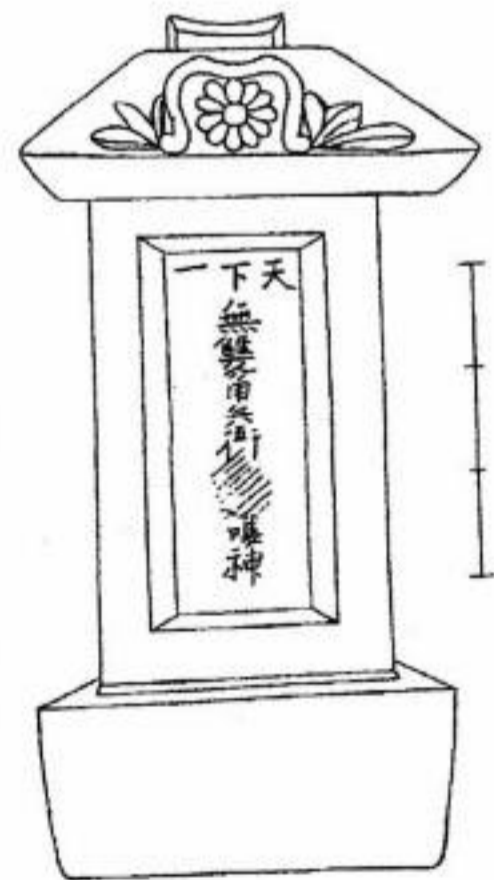


天保5年(1834)
大里村講中



享和2年(1802)
大里村

■「無双角兵衛守護神」文字塔 (大里八五番地 藤田家邸内)



寛政2年(1790)

・「天下一無双角兵衛」とは、下間久里の雨下無双角兵衛獅子舞の「雨下無双角兵衛」を指す。「雨」とは「天(あめ)」という意味である。「雨下」の読み方は、「あめのした、あめがした」である。あるいはこの石塔からわかることは、「天下(あめのした)」とも書き、もとは、「天下一無双角兵衛」と呼んでいたであろう。

・願主の八蔵は、藤田家の先祖である。大里の村人もこの獅子舞に加わっていた。江戸時代前期の獅子舞の世話人には、下間久里村以外の大里の村人もよくみられたことが次の資料でわかる。かつては大里の村人も加わって一緒に運営し、参加していたのであろう。

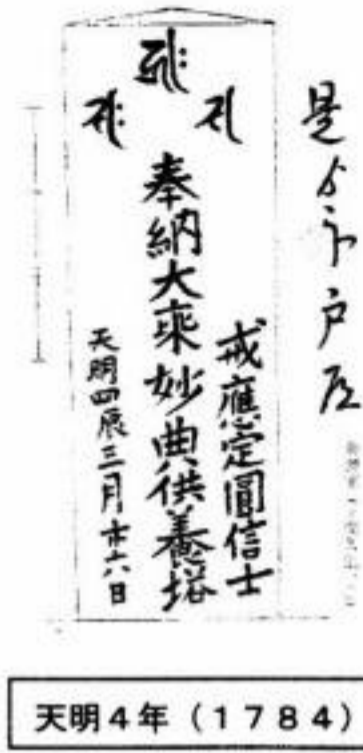
・三原善太郎氏著「下間久里(雨下無双角兵衛)獅子舞考」によると、地元「香取大明神御帳」(保管は新井隆一郎家)があり、その表紙には「文禄甲午」との年号が書かれ、文禄三年の甲午年(一五九四)を指しているという。そしてその中身は下間久里村にある香取社の祭礼にあたった宿元世話人、つまり年番を勤めた人々の名前が慶長元年より年ごとに代々記載されている。宿元は、下間久里村のみならず、南隣の太里村の住民の名もみられる。

三原氏(故人)は、文禄三年を香取神の勧請の年ととらえ、二年後の慶長元年の丙申(一五九六)に社殿が出来上がり、第一回の祭礼が実施したと推定している。そして獅子舞の初代太夫は新井太夫とし、慶長十七年(一六一二)頃と推定している。

■道標付き大乗妙典供養塔（荒井家にある舟戸の道しるべ石）

（これより舟戸道）

新井家（下間久里一〇）



※この道しるべは、江戸時代は、現在地より北方の荒井家本家（下間久里一三四〇）の道路反対側の下間久里会館近くにあったものと思われる。ここから間久里と船渡を結ぶ古道が日光街道から別れていたためである。ところが、大正年間から荒井家（下間久里一〇）南側の道路が船渡道に変わったので、現在の荒井家角地に移されたものと思われる。

※間久里と船渡を結ぶ舟戸（船渡）道

間久里の日光街道から間久里新田を過って、船渡村の新田や本村に通じる主要な道の江戸時代の道しるべである。もとは、日光街道に沿った現在の下間久里会館近くの路傍にあったと推定される。この辺りから、船渡に通じた古道があったのである。この古道は現在のマクドナルド下間久里店の東側隣の大杉公園通りにつながり（ここまでの古道の道筋は不明）、せんげん堀に架かる間久里新田橋を渡り、船渡新田の集会所（船渡二八六の海老名家の西隣、かつての山王社）の北側（現在はその北側の古道の名残は全く無い）を過って行ったのである。

明治の終わり頃から大正にかけて行われた新方領の耕地整理事業の時に、大里の鎮守稻荷神社から北東、間久里新田橋の方向に向かう直線の新道（現在の大里稲荷社からマクドナルド下間久里店の手前までの間のバイパスの一部にあたる）ができ、現在のマクドナルド下間久里店先の江戸時代の古道である船渡道につながった。その頃に、この道しるべは荒井家角地に移されたのであろう。荒井家南側の道は細い古道（農道）で、この古道を進むと、大正時代にできたこの新道にぶつかり、そこからは一直線に船渡に行けたのである。

なお道しるべに刻まれている荒井宗左衛門は荒井家本家の先祖であろう。また、道しるべがあったと思われるあたりは、荒井家本家の土地である。

○ 越谷だるま (昭59県知事指定・伝統的手工芸品)

(「越谷だるま」より)

●江戸時代武州だるまとして

江戸時代に中国から長崎の黄檗宗おうぼくしゅうの寺院に伝来したのが起源とされている。

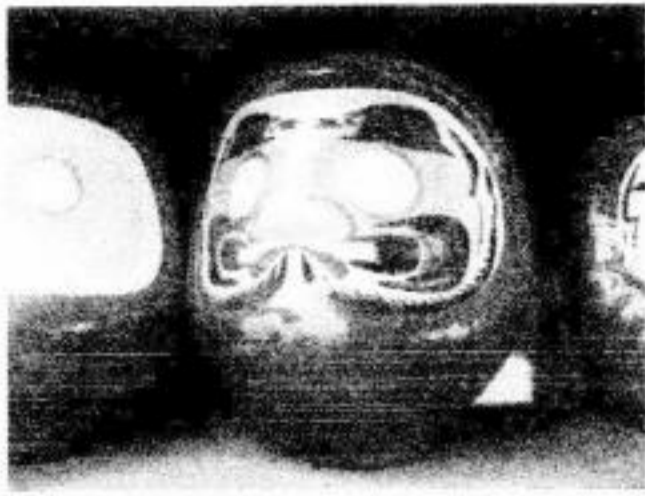
越谷だるまは、享保年間(一七一六〜三六)に「だる吉」という人形師によりはじめられたという。従来あった「起上り子法師」に、座禅を組んでいる達磨大師の姿をとり入れたもので、武州だるまとして江戸庶民の人気を集めた。

とくに江戸市中では家内安全・商売繁盛・五穀豊穰・福招き等の「開運だるま」として好評であった。

●中村家のだるま

中村家の屋号は「達磨屋」でここで生産されたダルマは、埼玉のダルマとして全国的に知られている。

戦後、達磨や張り子玩具の作りで、外国人の見学もよくみられた。達磨は柴又の帝釈天などに出荷された。



美男子な越谷だるま

●現代人にも様々な願い事に

越谷だるまの出荷先は、関東一円をはじめ、北海道から九州まで広く親しまれている。

最近では、企業の歳暮・年始・記念品・受験生の合格祈願・結婚式の引出物・貯金だるまなど利用度も多くなり、海外からも注文がある。

祈願を託すときは、だるまの左目を入れ(入魂)、願いがかなうと右目を入れて神社に奉納するのが習わしとなっている。

●美男子の越谷だるま

越谷だるまは他の産地のだるま等に比較して、色が白く、鼻がやや高い、上品で優しい顔立ちが特色である。

だるま作りには、型取りから下張り、ひげ描きまですべて昔から変わらぬ手作業でおこなわれ、なかでもだるまの生命ともいえるひげ描きには穂先の長い面相筆を使い、大小にかかわらず同じ筆で描く。そのためだるま一つ一つみな表情が異なり、個性的である。

出来上がるまで10工程かかり、一個出来上がるまで約3日。

現在組合(九業者)には代々家業として伝承され、最近では伝統を受け継ぐ若い後継者も多く、年間約50万個を生産されている全国有数の産地として有名である。

●五色だるま

幕末から明治にかけて越谷などの達磨業者は、紫・白・赤・黄・緑の塗料を使った親指大のだるま五体を一對とした五色だるまを盛んに生産していた。

この五体のだるまに塗られた五色は、大日如来がそなえている五つの智慧、五つの仏を象徴し、人々の願望や憧れを現したものと考えられている。

●他の主なだるま

・高崎だるま

群馬県高崎市で生産されている（「上州だるま」とも）。
 全国生産の80%に匹敵する年間130万個が生産されている。
 球に近い形状の赤色の胴体にくぼんだ白い顔。そこに豪快な髭
 と眉毛が描かれている。

「選挙だるま」のほとんどが高崎で生産されている。

・白河だるま

福島県白河市で生産されている。

あごひげの長いのが特徴。

厄除け・家内安全の赤だるまと、開運利益の白だるまが作ら
 れている

年間15万個が生産されている。

・東京だるま

拜島大師や深大寺のだるま市で知られる。

合格祈願だるまやカラフルだるまといった近代的だるまの発
 祥とされている。

・姫だるま

神功皇后に由来するだるま体型の人形。愛媛県が発祥。

●赤色の理由

・古来より赤色を基調とした塗装がほとんどであった。

・これは達磨大師が赤い衣を着ていたとされる事に由来するが、そ
 のほかに、赤色には魔除けの効果があると信じられていた事や、
 疱瘡（疱瘡での失明者が多かった）を引き起こす疱瘡神が、赤色
 を嫌うと信じられていた事からも由来しているのではないかと
 されている。

・以上の事から、だるまは疱瘡除け・魔除けの力がある玩具として
 子供に与えられた。

●越谷だるまに関する歴史年表

（平成十二年度越谷市文化財講習会

「越谷の張り子玩具」 講師・高崎力氏）より

一七三五頃	享保二〇年頃	間久里（越谷）のだる吉がダルマを作り始めたとの言伝 えあり
一七七〇頃	明和初年	上州高崎の小林山達磨寺の東嶽禪師の描いたダルマ絵 を豊岡村（高崎市）の農夫が木型を作り紙で張り子ダルマ を作った江戸へ売り出し評判となる。
一七八四頃	天明年間	鴻巣では練人形「鴻巣赤物」を考案し鯉金・熊金・鯛車・ ダルマ・獅子頭など売り出す。
一八五五頃	安政年間	上州豊岡村（高崎市）の行商の「まくり達磨」からヒン トを得て「多摩ダルマ」が作られた。
一八六六頃	幕末の頃	船渡（越谷）の松崎久兵衛は張り子玩具・ダルマなどを 作り始める。
一八七五	明治八年	船渡新田（越谷）の高橋八太郎（明治三没）は下間久里 （越谷）に出て本格的にダルマ製造を始める。船渡新田 の旧住居は「ダルマ屋敷」といわれてきた。
一九三二	昭和七年	下間久里（越谷）ダルマ生産年四万個、熊谷・館林方面 に出荷。
一九四二	昭和十七年	桜井村・大袋村のダルマ業者は二十二軒（越谷市） 「正月の川崎大師と柴又帝釈天の達磨市では越谷系達磨 は他の産地を足元へも寄せ付けない」（東京日日新聞） 桜井村・大袋村のダルマ製業者 三〇軒 生産高 五万個 生産額 一万円
一九四四	昭和十九年	桜井村のダルマ屋 六軒 生産高 二万六千個
一九五五	昭和三〇年	越ヶ谷達磨は東方九位・前通では四位にランクされてい る。（日本玩具の会主催 日本玩具番付表）
一九八三	昭和五八年	武州ダルマ生産者調査（三田村佳子）
一九八四	昭和五九年	岩槻市（四軒） 春日部市（四軒） 越谷市（一一軒） 九月二七日 越谷だるま埼玉県伝統的手工芸品に指定
一九八五	昭和六〇年	関東ダルマ生産額
		高崎ダルマ 五億円・日本一生産額
		越谷ダルマ 八千万円
		平塚ダルマ 六千万円
		越谷だるま組合員 九軒
一九九八	平成一〇年	越谷ひな人形組合員 三九軒

* 船渡新田は、達磨の型を作るには、ちょうどよい粘土がとれた。
 娘が下間久里に嫁いで達磨作りを下間久里に伝えた。

主な参考資料

- ・昭和57年 埼玉県民俗センター「下間久里の獅子舞」
- ・昭和57年 埼玉県教育委員会「獅子舞の分布と伝承」
- ・日本宗教事典（弘文堂）
- ・日本民俗大辞典（吉川弘文館）
- ・越谷市教育委員会「越谷市指定文化財」
- ・加藤幸一氏「石仏」資料
- ・一九九三年 山形県西村山地域史研究会「西村山地域史の研究」
- ・パンフレット「越谷だるま」
- ・平成12年度越谷市文化財講習会「越谷の張り子玩具」資料

講師 高崎力氏